

ネットワークを活用した教員のコミュニティづくり

ー「情報」関連の授業公開キャラバンを通してー

長尾 尚・飯田英佳・小林直行・市川隆司（大阪府私学教育情報化研究会）稲垣 忠（関西大学大学院）

・取り組みの概要

「情報」関連の授業公開キャラバンとは、情報機器を活用した公開授業を開き、参加教師の間で教科「情報」や、教育の情報化に向けた課題を共有できるコミュニティづくりを図るプロジェクトである。平成13年9月に開始以降、16回の授業が実施され、大阪府を中心に延べ500名程の教員が参加している。＜平成13年度「インターネット教育利用のための地域活動支援」事業＞公開授業では、単に授業を参観するだけでなく、授業前にはネット上で指導案について議論し、授業後には意見交換会を実施することで、全ての参加者が課題意識を持って取り組めるように工夫している。また、本企画は、コアメンバーである教師が中心となり、大学、企業等の協力を得て運営している。

・教員のコミュニティをいかにつくるか？

＜「情報」関連の＞としたことで、本コミュニティには、情報科だけに限定されない、様々な教科、立場の教員が参加している。「落下運動のシミュレーション」「ネット de ディベート」「3D グラフィックスでカードを作ろう」等、それぞれの教科特性を活かした公開授業を開くことができ、様々な見方・意見を得られるメリットがある。ただしその反面、学校も課題意識も異なる教員の間では、とりとめのない、まとまらない議論に終始してしまう危険性も考えられる。公開授業については、「焦点化された議論とその成果をどう共有するか?」、意見交換会では、「多くの参加者にとってメリットとなる場をどうコーディネートするか?」についてキャラバンを続ける中で、いくつかの知見を得ることができた。

授業公開までの流れを「授業者」「参観者」そして「運営サイド」（企画・実施）の3者の視点から整理したのが図1である。授業者・参加者・運営サイドは、公開授業の実施というプロジェクトを「ネットワーク上のコミュニケーション」と「対面の機会」とを組み合わせながら進めていく。このプロセスでは、教員自身が、ネットワークを主体的に活用し、情報を発信しあい共有を図る「情報活用能力」が求められる。つまり「このコミュニティに参加し運営に携わること」それ自体も「教員研修としての側面」を十分に備えていると言うことができる。

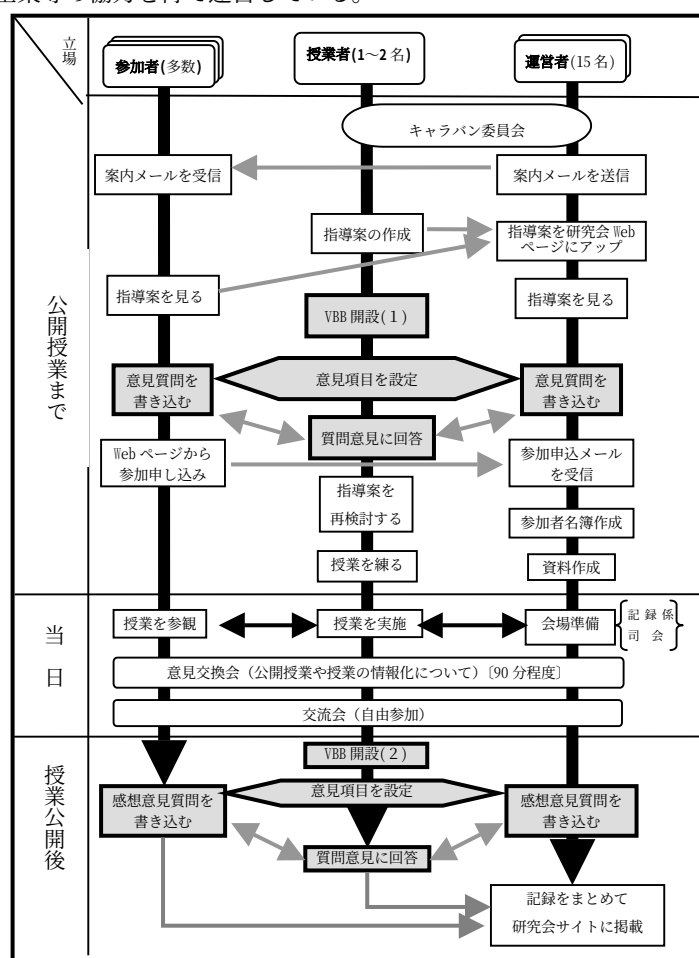


図1 キャラバン関係者の間の情報の流れ

・ネット上の意見交換と連動した公開授業

Virtual Brainstorming Board(以下 VBB)は、スプレッドシートのセルのように、セル単位で意見を書きこみ利用者間で一覧できる Web ベースのツールである。セルには、参加者の誰もが書き込めるが、発言者名は表示されないため、誰が書いたのかは分からない。また自分が書き込んだ直後に、他の意見全体を一覧できる。

授業前の時点で指導案は Web サイトに公開される。それを見ながら、参加者は自分の意見やアドバイスを VBB に書き込んでいく。匿名性を活かすことで活発な意見交換が生まれた。授業者は、ボード上に項目立てをすることができる。例えば、図2の画面では、生徒のプレゼンテーション発表が主な内容だったために、(1)プレゼンの課題について、(2)プレゼンの時間、(3)グループ分けの方法、(4)評価方法、の4項目が設定された。授業者が見てほしい点を明確にアピールしつつ、その項目に関する書き込みから、自分の授業のどの辺りに参加者の関心があるのかを知った上で授業を練り直して、公開授業に臨むことが可能になっている。

さらに当日の意見交換会では、この VBB の画面を印刷して配布する。公開授業をめぐる論点のある程度整理した上で議

論を行なうことが可能となる。積み残した議論や新たな疑問などは、授業後に設置されたボードに書き込んでもらうことで議論を継続する場合もある。

VBB ボード：(<http://www.kobatec.com/caravan/>)

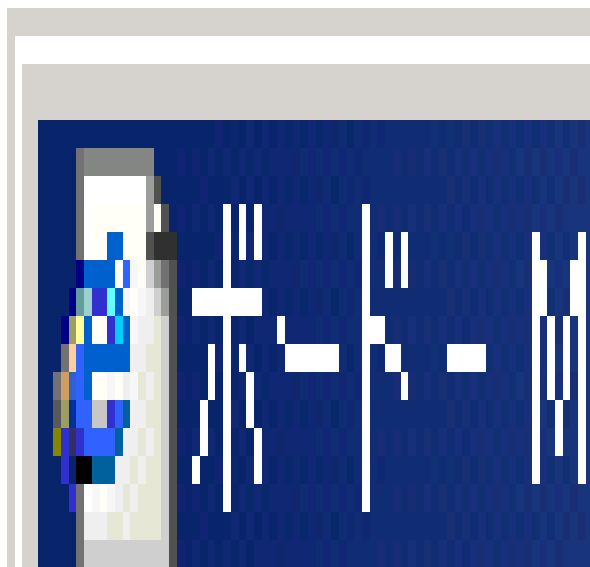


図2. 授業前の VBB への書き込み



図3. Webページのまとめ

・Web上のポートフォリオによる共有

公開授業の様子は、全てWebページ化され、大阪私学ネットのサイト(<http://www.osaka-sigaku.net>)に公開される。これには、公開授業の様子を写真付で紹介するだけでなく指導案、生徒の作品や感想、授業者によるコメント、意見交換会のサマリまでが記録される。いわばキャラバンのデジタル・ポートフォリオとしてWebページが蓄積されていくことで、キャラバンに毎回参加できなかった教師もそれを見ることで参加意識を共有でき、継続的に公開されていることで、新しく興味を持った教員には、これまでのキャラバンの取り組みを知る手がかりを提供している。

・参加者の声

- ・今までは、生徒にここの部分を教えたいという意識をあまり持たずにやってきたが、キャラバンに参加してからは、授業のねらいや押さえたいポイントを再確認するようになってきた。
- ・自校では、専門的に相談できる先生がいないので、自分が進めようとしていることや実践している情報教育がこれでいいのかという不安を感じるが、他校の実践を見学し、経験豊かな先生方との交流を持つことにより、授業の軌道修正をすることが出来ている。
- ・自分も授業を公開し、話題として取り上げてもらいたいという自己研鑽の意欲が向上した。
- ・今までこのキャラバンの意見交換会に出ていて、一度も批判的な意見を聞いたことがない。かといってアドバイスがないわけではなく、授業で見落とししている箇所などは、ちゃんと指摘されているように感じる。
- ・こんなに多くの先生からコメントや助言がもらえるのであれば、是非、自分の授業を見てもらって、自分の学校でもこのキャラバンを開いて欲しい。

・まとめと今後の課題

以上のように本プロジェクトは、「教員研修」とは謳っていないが、「公開授業による教員の力量の向上」と「ネットワークを活用した運営による教員の情報活用能力の育成」という2つの機能を併せ持っている。『授業のイメージがわからない新教科「情報」をいかに具体化させるか』という課題解決を1つの柱にしながらも、他教科の教師を巻き込みながら、教育の情報化を実現するコミュニティを、学校の枠を超えて築き上げることに成功しつつある。その背景には、ネットワークと対面のそれぞれの特性を活かした運営上の工夫があった。ネットワーク上では、「匿名性や公開性を活かした情報共有」を図り、対面の場では、公開授業、意見交換会、さらに終了後に近くの店などで食事をしながらの反省会といった「密度の濃いコミュニケーション」を続けてきたのである。

今後の課題としては、公開授業、意見交換会の質を高めながらも、新参加者が気軽に参加し、公開授業ができるようなコミュニティの雰囲気づくりを維持していくことが重要である。さらにこれまで1回毎の公開授業を元にした意見交換を中心としてきたが、教科「情報」の特徴を考え、総合実習のようなより長期の単元レベルでの議論や教科全体のカリキュラムをどう構成していくかについても話し合えるワークショップを企画することも検討している。